様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月　 １ 日現在

機関番号：３４５１１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３４７９

研究課題名（和文）空範疇・空演算子に対する英語前置詞と日本語格助詞の平行性

研究課題名（英文）Parallels between Japanese case markers and English prepositions regarding null elements

研究代表者
本田　隆裕（Honda, Takahiro）

神戸女子大学・文学部・准教授

研究者番号：２０７５６４５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語格助詞と英語前置詞が空要素と共起できない点に着目し、両者に共通する特徴を探ることを目的とした。日本語格助詞は随意的に省略が可能な場合があるが、音形を持たないproは格助詞と共起することはできない。また、英語の関係代名詞はwh語である場合も空演算子である場合もあるが、前置詞の補部に現れた場合、関係代名詞は空演算子であってはならない。これらの現象を説明するために、日本語格助詞と英語前置詞はラベル付けに素性共有を必要とする弱い主要部であると提案した。さらに、再分析を対併合に基づいて捉え直すことで、前置詞の目的語にならないthat節が擬似受動文の主語として出現可能な理由を説明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本語においては音形を持たない代名詞類であるproが出現可能であることと、日本語格助詞の脱落は多くの場合随意的であることはよく知られた事実であるが、proも名詞の一種であると考えた場合、proが現れた場合に格助詞脱落が義務的である理由は検討されていない。また、英語の関係代名詞は省略されることもあるが、前置詞と共起した場合は省略できないことが知られている。これらの事実は一見すると無関係に思われるが、音形を持たない空要素と共起できないという事実に着目すると日本語格助詞と英語前置詞の間には何らかの共通点が存在すると考えられ、その共通点を調べることで人間言語の仕組みの理解に貢献することを試みた。

研究成果の概要（英文）：This research aims at exploring parallelism between Japanese case markers and English prepositions, both of which cannot co-occur with phonetically null elements. Although nominative and accusative case markers in Japanese can be optionally omitted, case marker drop is obligatory when the host is a null element such as pro. In addition, English relative pronouns can be either wh-words or null operators, but they cannot be null operators when they are complements of prepositions. To explain these phenomena, I have proposed that Japanese case markers and English prepositions are weak heads that cannot provide labels without sharing Case features, and that null elements lack the features. I have also explained why a that-clause can be the subject of a pseudopassive sentence in English while it cannot be the object of a preposition in the active by formulating Reanalysis under Pair-Merge.

研究分野：統語論

キーワード：格助詞　関係詞　前置詞　素性共有　ラベル付け　反ラベリング　擬似受動文　φ素性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本語では、名詞句の格が格助詞として顕在的に現れることが知られているが、一方で、主格・対格については格助詞を省略する格助詞脱落が生じても、格助詞脱落が生じなかった文と論理的に同じ意味を表す場合がある。また、格助詞脱落は多くの場合随意的であり、日本語は空の代名詞類である *pro* が生起可能な空主語言語の一つと考えられているが、*pro* と格助詞は共起できない。これは、*pro* も名詞の一種であると考えれば、なぜ *pro* が生じた場合は格助詞脱落が義務的であるのか不思議である。

このような現象は、英語の関係詞と前置詞の間にも見られる。英語では関係代名詞として wh 語が現れる場合もあれば、顕在的な関係代名詞が現れない場合もある。顕在的に関係代名詞が現れない場合は音形を持たない空演算子 Op が関係代名詞として出現しているとする分析を採用すれば、例えば、「私が話しかけた男性」という意味の英語の表現は、the man [who(m) I spoke to], the man [to whom I spoke], the man [Op (that) I spoke to]という３つの表現が可能である。ところが、the man [to Op (that) I spoke]という表現は不可能である。*pro* も Op も音形がないという点では共通しており、この前置詞と Op の関係は、上述の日本語格助詞と *pro* の関係に類似していると言える。そこで本研究では、音形を持たない空要素に対して、日本語格助詞と英語前置詞の間にどのような平行性が見られ、それらが何に起因しているのか考察することにした。

加えて、生成文法では日本語格助詞は名詞句の一部であると分析されることが多いが、「[ここから]-が 登りやすい」のように後置詞句にも格助詞を付けることができることから、格助詞を独立した語彙項目と仮定することで、英語前置詞との新たな類似点が見つからないか検討することにした。さらに、あまり議論されることのない英語前置詞の格付与の仕組みに焦点を当てることで、先行研究では説明できなかった擬似受動文の例についても説明することを目標とした。

２．研究の目的

本研究の目的は(1)–(6)の文法性を説明するような理論を構築することである。

(1) a. ジョンが リンゴを 食べた。
　　b. ジョン Ø リンゴ Ø 食べた。　　(「Ø」＝ 格助詞の脱落形)

(2) a. 彼{が/Ø} 来た。
　　b. *pro*{*が/Ø} 来た。

(3) a. the man [to whom I spoke]
　　b. * the man [to who I spoke]
　　c. the man [whom I spoke to]
　　d. the man [who I spoke to]
　　e. * the man [to Op (that) I spoke]
　　f. the man [Op (that) I spoke to]

(4) a. * John insisted on that you be here on time. (Inada 1981: 127)
　　b. John insisted that you be here on time. (Rosenbaum 1967: 83)
　　c. That you be here on time was insisted on by John. (ibid.)
　　d. * That you be here on time was insisted by John. (ibid.)

(5) a. It is impossible for Bill to win at roulette. (Hornstein 1999: 92)
　　b. * It is impossible Bill to win at roulette.

(6) a. * It is impossible for PRO to win at roulette.
　　b. It is impossible PRO to win at roulette.

(1), (2a)に示すように、通常の名詞句および代名詞の格助詞脱落は随意的であるが、(2b)が示すように、*pro* の格助詞脱落は義務的である。(3c, d, f)が示すように、動詞と前置詞が再分析(Hornstein and Weinberg 1981)されている場合は、関係代名詞が who, whom, Op のいずれであってもよいが、前置詞とともに関係代名詞が現れる場合は whom のみが出現可能となる。Op だけでなく、who も出現不可能であることから前置詞が付与する格が関係しているものと思われる。加えて、前置詞の格付与と関連して、(4a)と(4c)および(4b)と(4d)のような能動文・(擬似)受動文のペアを取り上げ、それぞれ対応する能動文および受動文が容認されない理由を検討する。また、英語の不定詞節の主語は(5a)のように顕在的に現れる場合もあるが、(6b)のように音形を持たない PRO として出現する場合もある。顕在的な主語は for により導かれ、逆に PRO は for と共起できない。for は補文標識と分析されるが、音形を持たない空要素である PRO と共起できないことから、(3)の前置詞と Op の関係との類似性が見られないか検討する。

３．研究の方法

まず、日本語の格助詞が最新の生成文法理論(Chomsky 2013, 2015)においてどのように扱われるべきか検討するために関連する先行研究を調査した。特に、日本語において格助詞の存在が、英語などの言語では不可能な多重主語を可能にする一方で、英語などの言語では見られる人称

や性などのφ素性一致が日本語では欠如している事実を説明するものとして分析している Saito (2016)の主張と本研究との関連を検討した。また、(2b)の反例と思われる、Goto (2012)等で指摘される Particle Stranding Ellipsis の例（A:「ジョンがどうしたの？」 B:「[e]-が/-は 会社を辞めた。」）をどのように説明するべきか検討した。さらに、格助詞脱落のうち、主格の脱落は対格のそれと異なり、主節では可能であるが補文内では不可能である事実についても検討した。

次に、英語の関係節については、最新の生成文法理論の分析に合致する Donati and Cecchetto (2011)および Cecchetto and Donati (2015)の分析と本研究との関連を検討した。また、一部の辞書等で(3b)のような表現（正確には、“To who?”のような疑問文）も可能であるとの記述が見られたため、念のため(3)の文法性判断について同じ所属機関の英語母語話者に確認をした。（問い合わせの結果、(3)に示す文法性判断が妥当であることがわかった。）

さらに、(4c)の擬似受動文は文主語構文でもあるため、文主語構文に関する先行研究の調査を行い、本研究との関連を調査した。

加えて、⑸−⑹について検討するため、最新の生成文法理論において格付与に関する中心的概念である素性継承との関連を調査した。

４．研究成果

＜(1), (2)について＞

Saito (2016)の分析に基づき、DP は一致により値付与される抽象格素性を持ち、日本語の格助詞は DP を補部に取る機能範疇であるが、格助詞そのものも抽象格素性を持ち、さらに併合により値付与される形態格素性も持つと提案した。本研究では、Saito (2016)が主張する反ラベリングが、Chomsky (2013)では言及されていない、{<素性, 素性>, XP}という集合のラベリングに起因する可能性があることを示した。XP のラベルは潜在的にラベルになり得る要素であることから、{<素性, 素性>, XP}という集合のラベルは XP のラベルとなると仮定することで、この<素性, 素性>のラベルを持つ集合に含まれる要素はラベリングから不可視となると主張した。また、本研究では格助詞が Chomsky (2015)における弱い主要部(weak head)であり、ラベル付けのためには素性共有を必要とすると仮定した。これにより、DP が格助詞と併合された集合のラベルは DP と格助詞が共有する抽象格素性となり、他の句と併合された集合は、{<格素性, 格素性>, XP}となることから格助詞との集合に反ラベリングが生じる理由を説明した。さらに、格助詞脱落は格助詞が併合されない場合であることになり、φ素性一致を欠く日本語においては、{DP, TP}の集合のラベルは英語のようにφ素性とはならないが、Miyagawa (2010)に基づき、{DP, TP}のラベルは話題素性になると主張した。加えて、音形を持つ要素のみが格素性を持つと仮定すると、{*pro*, 格助詞}という集合はラベル付けが不可能になることが説明できる。一方、Saito (2007)によれば *pro* は典型的談話要素であることから、{*pro*, TP}という集合は話題素性によりラベル付けされることから、(2b)の文法性が説明できると主張した。なお、主格の格助詞脱落が主節でのみ可能である理由については、主節の C-T のみが話題素性を持つためであると提案した。（ただし、この点については、主節はラベル付けを必要としないという Miyagawa et al. (2019)の提案に基づく再考を今後の課題としたい。）

なお、Particle Stranding Ellipsis のような例は、必ず先行文脈が必要であり、例えば、(7)のような会話は自然であるが、(8)のような会話は不自然である点を指摘し、(2b)のような例は Particle Stranding Ellipsis とは別に検討されるべきであると主張した。

(7) A: *pro* 来たよ。
　　B: 誰が？

(8) A: [e]-が/-は 来たよ。
　　B: # 誰が？

＜(3)について＞

Donati and Cecchetto (2011)によれば、wh 関係詞は先行詞 N を補部に取る D であり、例えば、(3c)の派生では、D である whom と N である man が外的併合され、関係節内に現れる。次に、DP である[whom man]が関係節 CP の指定部へ内的併合し、さらにその位置から N である man のみが再び CP 指定部へ内的併合される。この段階で、構造全体は NP となり、D である the に補部として選択され得る。一方、Donati and Cecchetto は、(3f)のように wh 関係詞が現れない場合、先行詞 N は音形のない D の補部として基底生成し、N のみが関係節 CP へ移動すると主張している。しかし、(3a)のように PP の関係節との内的併合が可能なのであれば、Op をどのように分析するかは別として、(3e)が非文法的である理由が説明できない。これに対して、Cecchetto and Donati (2015)では関係節に that が現れる場合について、that は先行詞 N を補部に取る D として基底生成されるが、that を含む DP が関係節の先頭へ移動し、DP の中から先行詞 N が取り出されることで、D であった that が補文標識 C となり、関係節 CP をラベル付けする役割を果たすと説明している。この分析では、(3e)を排除できるが、関係節における that が先行詞 N を補部に取る D として(that が指示詞として)現れるならば、[the men {that/*those} I saw]のように N が複数名詞となる場合の派生が不明である。

そこで、本研究では、英語前置詞は日本語格助詞と同様に解釈可能な抽象格素性を持った弱い

主要部であり、(3e, f)における関係詞は空演算子 Op であると仮定した。これにより、who は主格または対格の値を持ち、whom は対格または斜格の値を持つと考えた場合、(3a, b)の文法性については、{to, whom}という集合は斜格の格素性共有によりラベル付けが可能であるが、{to, who}という集合は共有する素性がないためラベル付けが不可能であると説明できる。同様に、(3e)が非文法的であるのは、{to, Op}という集合に共有される素性が存在せず、ラベル付けが不可能であるためと説明できる。さらに、(3c, d)では、to は再分析により複合動詞の一部となっており、wh 関係詞に付与される格は対格であるため、who も whom も出現可能であり、(3f)では、Op は、関係節主要部の C が持つ述部(predicative)素性(Rizzi 1990)と一致し、その素性によりラベル付けされていると説明できると主張した。

＜(4)について＞

Tanigawa (2018)によれば、that 節は DP の場合と CP の場合があり、文主語構文の that 節は DP であり、値未付与の演算子素性を持っている。この分析を取り入れることで、that 節が主語となる擬似受動文については対応する能動文が非文法的になる理由を説明した。本研究では、insist のような動詞は PP または CP を選択すると仮定した。これにより、(4b)と(4d)の that 節は CP であると考えられるが、CP は主語になれないため、(4d)が非文法的である理由を説明できる。一方、(4a, c)の that 節は前置詞に選択されていることから DP であると考えられるが、(4a)では、that 節が前置詞の補部の位置を占めており、この位置では that 節の演算子素性に値が与えられないため非文法的となっているが、(4c)では that 節が時制辞と併合されることで演算子素性に値が与えられるため文法的となると主張した。

なお、本研究では、(4c)のような擬似受動文は、P が DP と集合併合(Set-Merge)された後、P が V と対併合(Pair-Merge)されることで、V と P が一つの複合動詞として再分析され、よって P の補部 DP が通常の他動詞の目的語と同様に受動化が可能となると提案した。この分析は、(9)のような例の説明を可能とする。

(9) a　I talked to John and Bill about themselves/each other.
　　b. * I talked to themselves/each other about John and Bill.
　　c.?? I talked about John and Bill to themselves/each other.
　　d. * I talked about themselves/each other to John and Bill.　(Jackendoff 1990: 431)

上記のような例では最初の PP の補部 DP が２つ目の PP の補部 DP を束縛していることを示しているが、両者の間には一見すると非対称的な c 統御関係が見られない。しかし、最初の P が V と対併合されていると考えると、最初の PP の補部 DP は V の補部となり、Chomsky (2008)によれば V の補部 DP は VP 指定部に移動しているため、(9)において最初の PP の補部 DP が２つ目の PP の補部 DP を非対称的に c 統御していると説明できる。

さらに、本研究では当初、that 節が主語となる擬似受動文の派生を説明するために、that 節について、値未付与のφ素性を持つ D が CP を選択するような構造を仮定していた。この分析は上記のように、Tanigawa (2018)の提案に基づく分析に修正したが、一方で、D が値未付与のφ素性を持つという仮定を、過去の研究課題で取り上げた there 構文の分析に応用することで、there 構文に見られる一致現象や動詞の種類の制約に関する新たな論文を執筆することができ、日本英語学会の *English Linguistics* に論文が採択された。

＜(5), (6)について＞

Chomsky (2008)以降の生成文法で採用されている素性継承に基づく分析では、時制辞の主語名詞句に対する主格付与と動詞の目的語名詞句に対する対格付与のみが説明されており、前置詞の目的語名詞句に対する斜格付与に関しては説明されていない。そこで、本研究では、前置詞も時制辞や動詞と同様に素性継承に端を発する格付与を行っているのか検討した。前置詞はフェイズ主要部ではないが名詞句への格付与に必要である解釈不可能なφ素性を選択的に持ち、フェイズ補部領域の全てのφ素性一致が転送により駆動されると仮定することで、前置詞の格付与が説明できることを示した。また、 Hornstein (1999)に従い、(6)の不定詞節空主語は PRO ではなく *pro* であると定義した上で、格付与を担うと考えられる不定詞節の for は前置詞ではなく that と同じく補文標識であるが、素性継承において前置詞的性質を保持しており、異なるタイプの要素間における素性継承は不可能であると仮定することで、for と空主語 *pro* が共起できない理由を説明した。（ただし、(5), (6)の例については、Excorporation という派生の仕組みを提案する Egashira (2016)に基づく再考を今後の課題としたい。）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 本田　隆裕	４．巻 52
２．論文標題 前置詞と素性継承	５．発行年 2019年
３．雑誌名 神戸女子大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 13-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Takahiro Honda	４．巻 18
２．論文標題 Prepositions and Null Determiners	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Osaka University Papers in English Linguistics	６．最初と最後の頁 113-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/67786	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 本田　隆裕	４．巻 51
２．論文標題 格助詞とゼロ代名詞	５．発行年 2018年
３．雑誌名 神戸女子大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 17-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 本田 隆裕	４．巻 論文集
２．論文標題 空要素に対する日本語格助詞と英語前置詞の平行性	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『英語学の深まり・英語学からの広がり』，英宝社	６．最初と最後の頁 220-232
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Takahiro Honda	4．巻 37
2．論文標題 A Split Phi-Features Hypothesis and the Origin of the Expletive There	5．発行年 2020年
3．雑誌名 English Linguistics	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Takahiro Honda	4．巻 19
2．論文標題 Deriving Pseudopassives by Pair-Merge	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Osaka University Papers in English Linguistics	6．最初と最後の頁 65-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 Takahiro Honda
2．発表標題 Parallels between Japanese case markers and English prepositions regarding null elements
3．学会等名 The 43rd annual Penn Linguistics Conference（国際学会）
4．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

1．著者名 南佑亮・本田隆裕・田中英理(共編著)	4．発行年 2020年
2．出版社 英宝社	5．総ページ数 268
3．書名 『英語学の深まり・英語学からの広がり』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考